

Sanshirō Chapter 13 (Natsume Sōseki)

原口さんの絵はでき上がった。丹青会はこれを一室の正面にかけた。そうしてその前に長い腰掛けを置いた。休むためでもある。絵を見るためでもある。休みかつ味わうためでもある。丹青会はこうして、この大作に低徊する多くの観覧者に便利を与えた。特別の待遇である。絵が特別のできだからという。あるいは人の目をひく題だからともいう。少数のものは、あの女を描いたからだといった。会員の一、二はまったく大きいからだと弁解した。大きいには違いない。幅五寸に余る金の縁をつけて見ると、見違えるように大きくなった。

原口さんは開会の前日検分のためちょっと来た。腰掛けに腰をおろして、久しいあいだパイプをくわえてながめていた。やがて、ぬっと立って、場内を一巡丁寧に回った。それからまたもとの腰掛けへ帰って、第二のパイプをゆっくり吹かした。

「森の女」の前には開会の当日から人がいっぱいいたかった。せっかくの腰掛けは無用の長物となった。ただ疲れた者が、絵を見ないために休んでいた。それでも休みながら「森の女」の評をしていた者がある。

美禰子は夫に連られて二日目に来た。原口さんが案内をした。「森の女」の前へ出た時、原口さんは「どうです」と二人を見た。夫は「結構です」と言って、眼鏡の奥からじっと眸を凝らした。

「この団扇をかざして立った姿勢がいい。さすが専門家は違いますね。よくここに気がついたものだ。光線が顔へあたるぐあいがうまい。陰と日向の段落がかつきりして——顔だけでも非常におもしろい変化がある」

「いや皆御当人のお好みだから。ぼくの手柄じゃない」

「おかげさまで」と美禰子が礼を述べた。

「私も、おかげさまで」と今度は原口さんが礼を述べた。

夫は細君の手柄だと聞いてさもうれしそうである。三人のうちでいちばん鄭重な礼を述べたのは夫である。

開会后第一の土曜の昼過ぎにはおおぜいいっしょに来た。——広田先生と野々宮さんと与次郎と三四郎と。四人はよそをあと回しにして、第一に「森の女」の部屋にはいった。与次郎が「あれだ、あれだ」と言う。人がたくさんたかっている。三四郎は入口でちょっと躊躇した。野々宮さんは超然としてはいった。

おおぜいのうしろから、のぞきこんただけで、三四郎は退いた。腰掛けによってみんなを待ち合わせていた。

「すてきに大きなもの描いたな」と与次郎が言った。

「佐々木に買ってもらうつもりだそうだ」と広田先生が言った。

「ぼくより」と言いかけて、見ると、三四郎はむずかしい顔をして腰掛けにもたれている。与次郎は黙ってしまった。

「色の出し方がなかなか洒落ていますね。むしろ意気な絵だ」と野々宮さんが評した。

「少し気がききすぎているくらいだ。これじゃ鼓の音のようにぼんぼんする絵はかけないと自白するはずだ」と広田先生が評した。

「なんですぼんぼんする絵というのは」

「鼓の音のように間が抜けていて、おもしろい絵の事さ」

二人は笑った。二人は技巧の評ばかりする。与次郎が異を立てた。

「里見さんを描いちゃ、だれが描いたって、間が抜けてるようには描けませんよ」

野々宮さんは目録へ記号をつけるために、隠袋へ手を入れて鉛筆を捜した。鉛筆がなくて、一枚の活版刷りのはがきが出てきた。見ると、美禰子の結婚披露の招待状であった。披露はとうに済んだ。野々宮さんは広田先生といっしょにフロックコートで出席した。三四郎は帰京の当日この招待状を下宿の机の上に見た。時期はすでに過ぎていた。

野々宮さんは、招待状を引き千切って床の上に捨てた。やがて先生とともにほかの絵の評に取りかかる。与次郎だけが三四郎のそばへ来た。

「どうだ森の女は」

「森の女という題が悪い」

「じゃ、なんとすればよいんだ」

三四郎はなんとも答えなかった。ただ口の中で迷羊、迷羊と繰り返した。